

同志社大学国文学会彙報

昭和四十三年卒業論文題目

日本文学古代前期

ホカヒビトの歌

石橋 千

抒情詩の成立について

―柿本人麿をめぐる―

加藤 操

万葉集挽歌論

松井 良子

万葉集卷十四(東歌)の序詞について

力武 郁子

山上憶良論

佐々木 良子

卷十一、十二に見る万葉の恋愛歌

鳥 節子

万葉集と動物

津田 百合子

大伴旅人論

和田 欣子

防人歌の研究

安原 貴久江

中臣老守と茅上娘子の贈答歌とその背景

横井 淳子

額田王論

永野 光代

額田王論

滝田 恭子

大伴旅人論

比嘉 美津子

オホナムチの命の説話

中村 陽子

記紀における歌物語の

文学的發展とその条件

中村 和代

天武天皇をめぐる

―天皇と文学―

服部 安貴子

日本文学古代後期

竹取物語における諷刺について

奥垣 和美

伝承説話と竹取物語

鈴木 瑳重子

伊勢物語―その本質と作者―

樋田 富士子

明石の君像

藤村 俊子

紫上創造の意味

宇野 啓子

源氏物語―夕霧像―

渡辺 民江

紫上の生涯とその意味

大下 直弘

平中物語の一考察

本多 俊枝

堤中納言物語の二考察

―その物語志向の反映
と短篇小説的發展―

服巻 幸子

蜻蛉日記

川田 信子

―その構造的性質―

楠本 静子

道綱母像

紫式部日記の世界

小林 とみ子

紫式部日記よりみた紫式部の人間像

光野 香

紫式部と紫式部日記

塚本 勉

紫式部日記の式部像

渡辺 雅子

和泉式部日記論

荒木 とも子

更級日記―その成立事情―

宮武 恭子

更級日記作者の人間像

多田 美保

更級日記作者の人間像

鶴飼 和子

紫式部における

土居 翠

宗教的人間像の一考察

日本文学中世

藤浦 梢

平家物語私論―実感とエネルギーの

平家物語論―仏教思想と無常観よりその

服部 あさ子

思想性を探る―

平家物語

池田 功子

―知盛という形象を通して―

平家物語におけるリアリズム

上村 寛子

平家物語にみる生と死

丸岡 純世

平家物語の主題

丸岡 純世

―覚一本について―

宮崎 史子

平家物語―清盛像―

中村 雅美

平家物語における発心説話について

斎藤 久美子

平家物語における清盛について

谷口 美都子

平家物語論

山田 陽子

―説話的方法をめぐって―

平家物語論

市川 敏子

説話文学史上における宇治拾遺物語

本間 弘子

御伽草子―その矛盾と混沌―

宮井 章子

お伽草子についての一考察

東田 礼子

御伽草子について

釜須 律子

―中世社会の庶民文学―

兼好私論

栗村 慎人

―兼好の人間像についての一考察―

徒然草研究

西山 佳香

西行論―歌とその受容―

歌人西行論

中瀬 恵子

西行―出家の原因について―

佐野 幸子

梁塵抄抄から閑吟集へ

釜須 昭子

若泉 芳子

藤原定家

久保勝美

良寛―その歌と生涯を通して見た人間像―

式子内親王

日野智美

臼井道子

建礼門院石京大夫の生涯と文学

大塚茉莉

日本文学近代・現代

実朝の歌における主体性の追求と

大下菊栄

夏目漱石論

東山弘

歌風の変遷について

星川洋子

物質文明社会における自我

日本文学近世

生井武世

―夏目漱石の作品から―

村上正幸

女殺油地獄の悲劇的世界の探求

乙野真知

春、家における藤村の「家」の把握について

近松世話浄瑠璃の性格と方法

安田瑛子

新生はありえたか

吉川幹子

近松の姦通物

田中敬子

新生の成立過程論

植山博子

近松心中物―心中天の網島を中心に―

前田郁子

石川啄木の思想と文学

萩野清子

日本永代蔵考察

小竹千恵子

石川啄木論―短歌と思想について―

中村洋子

世間胸算用の考察

社本知子

有島武郎論

岡陽子

好色一代女考察

高森栄子

有島武郎の思想とその形成過程

鈴木すみれ

西鶴「好色五人女」

渡辺千鶴

有島武郎「或る女」論

横田育子

芭蕉と西鶴との文学的過渡期

福嶋ちづ子

―本能的生活について―

津森純子

芭蕉と西鶴

真坂あや子

有島武郎「或る女」の必然性

平野尚熙

東海道中膝栗毛論

芥川龍之介論

―人および芸術家としての芥川―

亀岡則子

勸進帳の成立と展開

芥川龍之介論

―人および芸術家としての芥川―

芥川龍之介論

勸進帳の成立と展開

芥川龍之介論

―人および芸術家としての芥川―

芥川龍之介論

芥川龍之介論

芥川龍之介論

- 芥川龍之介論―苦惱と敗北の生涯― 水戸 智子
- 西方の人―その序論― 田代 武久
- 小林多喜二論
―その文学における女性像― 村岡 恵子
- 小林多喜二論―いかにして革命的インテ
リゲンチャになりえたか― 西村 良彦
- 太宰治論―神をめぐる― 金沢 蘭美
- 太宰治論―太宰にとつての文学の意味― 増田 ふじ江
- 大宰文学と現代の読者―実態調査報告― 岡崎 澄子
- 武田泰淳論 本田 ひろみ
- 武田泰淳論 橘 弘子
- 安部公房論 丸岡 春江
- 安部公房論 佐野 道子
- 高見順論―その生への執着― 馬場 敏子
- 中村光夫論―中村光夫における青春と
批評の方法― 古田 務
- 野間宏論―全体的人間像の追求― 羽鎌田 孝
- 志賀直哉論 浜田 茂彦
- 吉本隆明論―詩と思想をめぐる― 平尾 久美子
- 国木田独歩―その創作主体の問題― 一ノ瀬 孝子
- 伊東静雄論 犬塚 充代
- 斎藤茂吉研究 石黒 美智代
- 井上光晴論―原体験の確立について― 河村 秀子
- 正宗白鳥―その暗い部分― 小林 七生
- 石川達三論―社会小説を中心に― 松本 保子
- 中島敦論 森田 五子
- 木下尚江―その文学と政治性について― 成田 比佐子
- 堀辰雄 西村 弘子
- 大江健三郎論 野網 広子
- 高橋和巳論 野口 由紀江
- 深沢七郎論 小笠原 巨徳
- 森鷗外の初期三部作
―舞姫を中心として― 白井 孝雄
- 埴谷雄高―魂の二重性― 住谷 和恵
- 室生犀星文学の研究
―詩と小説は分離出来たのか― 谷口 太郎
- 中世文学と三島由起夫 山中 登志子

記録の役割について―変革のエネルギー―

をひそめるもの―

安井節夫

宮本百合子「伸子論」―原作と改作の

比較を中心にして―

鷺見貞夫

徳永直論―私小説リアリズムについて―

山口成子

二葉亭四迷論

北村 兎

国語学

院政期の語彙

―形容詞を通して見たる―

浅野敏彦

未然形に連なる終助詞「な」「なむ」「ね」

についての研究

林 敦雄

書写本平仲物語の国語学的研究

―仮名遣及び書写に関して―

小倉幸夫

昭和四十四年度卒業論文題目

日本文学古代前期

万葉抒情詩の成立

近藤俊子

高橋連虫麻呂論

前田京子

山上憶良論

村上誠子

大徳皇女御作歌に関する考察

中山和子

狭野茅上娘子における愛の悲劇的感情

竹内 己美子

叙景景の成立

山田 啓子

日本靈異記について

加藤 昌孝

異類婚説話の展開

老田 昌子

オロチ退治譚の実相

下村 栄一

おもろの発生と展開

宮原 涼代

―おもろさうしを中心に―

日本文学古代後期

竹取物語小論

―竹取作者の志向したもの―

笹田 敬子

伊勢物語―「昔男」の人間像―

田中 清子

伊勢物語論考―「むかし男」

を通してみたその内面世界―

山田 直子

明石の御方

葛野 由美

浮舟論

佐藤 正矩

源氏物語に於ける末摘花についての試論

陶山 夏美

女三宮降嫁における紫上

立川 千佳代

枕草子―その美意識を中心に―

長谷川 翠

枕草子論

長田博美

蜻蛉日記上巻の創造

金森紀之

道綱母の世界

山口薫

「紫式部日記」を通して見た

紫式部の人間像

花畑啓子

紫式部日記―「うつし心」

を通しての紫式部―

木村公恵

紫式部日記における紫式部像

高橋洋子

宮中生活における紫式部

本田礼子

和泉式部日記における式部の人間像と

その恋愛のあり方

石原浩子

和泉式部日記試論

田岡美久美

和泉式部日記における女主人公式部の恋愛

和田美代

更級日記―作者の精神の遍歴―

高木令子

諸作品に引用されている古今集の実態

宇野春美

日本文学中世

平家物語の悪行論

林田典子

平家物語に於ける女性の物語をめぐる

鹿ヶ谷事件と俊寛の悲劇

河越純子

平家物語の笑いについて

佐藤淑子

平家物語理解の為の私的思考

戸辺幸生

平家物語

田原剛

方丈記小論

鎌田ますみ

方丈記における長明の無常感

橋本良子

方丈記研究

広石幸子

つれづれ草と人間性

山沢みゆき

徒然草私感

浅井洋子

十六夜日記の中世的特色

宮武明美

十六夜日記研究

掛樋廣子

世阿弥と能去論と修羅能に関する小考

宇野善之

能と幽玄

古屋園代

世阿弥研究

播間多恵子

御伽草子物くさ太郎の説話性

石川優子

日本文学近世

好色五人女考

杉山高志

好色五人女考

曲春玉

好色五人女

野田 博子

有島武郎研究―或る女を中心にして―

好色一代男にみる粹という美意識価値意識

中谷 千美

好色一代男

西村 正義

有島武郎論―星座の到達点―

堀口 真寿美

女殺油地獄論―近松世話浄瑠璃の展開―

宮川 ふじ子

太宰治論

松谷 文代

出世景清にみられる新しさについて

末岡 千鶴子

樋口一葉論―悲劇からの展開―

野村 陽子

世話浄瑠璃と姦通曲

宇津木 康夫

井上光晴について

藤川 恵子

芭蕉の旅と紀行文について

野村 敦子

原民喜論―原民喜文学の限界

樋口 泰生

元禄文学論

高岡 純子

遠藤周作論―キリスト教と文学について―

堀江 万智子

日本文学近代・現代

田中 哲彦

三島由紀夫論

井門 康栄

二葉亭の懐疑の意味

山中 典子

植谷雄高論―文学史の方法論のために―

岩城 雅子

二葉亭四迷論―浮雲の成立と挫折―

窪田 正人

詩人啄木

栢野 洋子

夏目漱石論―自己本位の展開と達成―

高岡 富美子

木下順二論

宮川 祥子

漱石の現実肉薄の道程―三四郎、それから、

安岡章太郎私論

武田泰淳私論

森金 敬子

門をめぐって―

梶井基次郎論―梶井に於ける「母」

と「自然」―

中西 由美子

芥川龍之介の初期の作品―その人間性

西田 由美子

北村透谷

野呂 美子

の追求を中心に―

横沢 絹子

と「自然」―

産本 員子

芥川龍之介論―人と芸術と―

横沢 絹子

と「自然」―

産本 員子

の追求を中心に―

横沢 絹子

と「自然」―

産本 員子

の追求を中心に―

横沢 絹子

と「自然」―

産本 員子

の追求を中心に―

横沢 絹子

と「自然」―

産本 員子

宮本百合子論―創作方法を中心として―

山田 智子

話し言葉の場面

渡辺 和美

苦悩の狂的吐露者―高橋和巳論

商品のライフサイクルと広告コピーの文体的特性

杉瀬 和賀子

―自立を促す文学―

大利 佳子

「蓬萊曲」についての一考察

奥村 弘子

小川未明論

西田 和代

漱石に於ける「民」の問題

太田 益夫

梅崎春生論

大川 かゆり

武田泰淳の文学における「私」概念と

「世界」の概念―その発生と確立―

小林 美江

石川啄木論

野泉 直文

夏目漱石論

大浦 賢太郎

存在と詩意識―戦後の詩から―

奥田 守

見つめる目・書くこと

付 倉橋由美子考察

田原 百里子

安部公房論

芳野 祥博

国語学

新聞広告文の国語学的考察

木村 雅子

東山往來の研究

難波 潤子

「ものわりのはしご」の研究

竹村 信子

同志社大学国文学会集報